

恋愛経験・恋人の有無による恋愛観・一体感・信頼感の変動—大学生を対象として

Differences in feelings and attitudes toward lovers, closeness and the sense of trust; differences between those who have a lover now and those who do not; and differences between those who have ever been in love and those who have not

天谷 祐子

Yuko AMAYA

キーワード：恋人、恋愛観、一体感、信頼感

Key words : lovers, feelings and attitudes toward lovers, closeness, the sense of trust

要約

本研究は、Lee による恋愛類型理論に基づき松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田(1990)が作成した恋愛観尺度(LETS2)と Aron(1992)による一体感尺度(IOS)と天貝(1995)による信頼感尺度を大学生にたずねたものである。研究1では200名の大学生を対象に恋愛観尺度と一体感尺度を質問した。結果として(1)全ての大学生(全ての群)が恋人よりも将来の結婚相手により親密さを感じていた。(2)恋人のいる人は、そうでない人よりもエロス得点の高さが恋人との一体感と関連していた。恋人はいないが恋愛経験のある人はすべての LETS2 得点と一体感と関連していなかった。恋愛経験のない人は、エロス、アガペ、マニア、ストーゲイの高さと一体感が関連していた。研究2では379名の大学生が恋愛観尺度と信頼感尺度に回答した。結果として(1)恋愛経験のある人はそうでない人よりも信頼感得点が高かった。(2)恋人がいてその恋人と結婚したいと考えている人は、他の群よりもエロス得点が高かった。

Abstract

This study examined feelings and attitudes toward lovers in terms of the LETS-2 (Matsui, Tokusa, Tachizawa, Okubo, Omae, Okamura, and Yoneda, 1990), based on Lee's theory; closeness in terms of the IOS (Inclusion of the Other in the Self) scale (Aron, 1992); and the sense of trust (Amagai, 1995). In the first study, 200 undergraduates responded to LETS-2 and the IOS scale. The results were as follows: (1) All undergraduates felt closer to their future spouses than did lovers to each other, according to the IOS scale. (2) For those who had a lover, the high score of Eros (feeling romantic about one's lover's nearness) referred to the closeness of the lovers; for those

who did not have a lover currently but had previously been in love, none of the scores of LETS-2 referred to the closeness of lovers; and for those who had never been in love, the high scores of Eros, Agape (devotion to their lovers), mania (inflating their romances), and Storge (relationships similar to friendship) did refer to the closeness of lovers. In the second study, 379 undergraduates responded to LETS-2 and the sense of trust. The results were as follows: (1) Those who had ever been in love obtained a score on sense of trust higher than that of those who had not. (2) Those who had a lover whom they wanted to marry got the highest scores on Eros of any of the groups.

問題と目的

「恋愛が人を成長させる」と言われる。堀毛(1994)は恋愛が異性関係スキルの向上に寄与していることを指摘しており、詫摩(1973)は恋愛によって異性を見る目が養われることを指摘している。また青年期に恋愛を経験することは、そういった対人的なスキルアップに寄与するだけでなく、人生という長い観点から見ると、Erikson(1950)による初期成人期における発達課題の「親密性」の獲得、つまり特定の他者との間に親密な関係を築き上げ、「一生の伴侶となるべき相手との人間関係を形成し維持する能力を獲得(大野, 1995)」することにつながる重要な経験という側面もある。

しかし現代において、特定の異性と交際することが、そのままその後の結婚につながることを示しているわけではない。特定の異性と交際しても、残念ながら別れを余儀なくされる場合も出てくる。だが、特定の異性と交際し、その後その恋愛関係が解消された場合であっても、その恋愛関係の中で、青年が異性関係スキルの向上(堀毛, 1994)や異性を見る目が養われる(詫摩, 1973)だけでなく、青年自身の価値観に関わる側面の変化やそれに与える影響はあるはずである。このように、一つ一つの恋愛経験が青年にとってどのような意味があるのか、また彼らの生涯発達という長い観点から見てどのような影響があるのか、という視点は、社会心理学における対人コミュニケーションの分野での恋愛研究ではあまり問題にされていない。

また現在の社会心理学における恋愛研究においては、「結婚」は恋愛の進展段階の最終形態として位置づけられている。松井(1990)は、社会心理学における恋愛の位置づけが結婚と切り離して捉えられている点を指摘しているが、恋愛に対する態度や意識のバリエーションの多さに比べ、結婚の位置づけられ方は非常に紋切り化されている。現在の交際相手に対する捉え方がどのように変化することがその後の結婚と関連してくるのかといった視点を含めることが、恋愛から結婚へとというプロセスに伴う心理的变化を明らかにする上で重要であろう。本研究では、恋愛経験や恋人を持つということによって、青年自身にどのような意味があり、価値観の変化に寄与しているのか、ということに注目する。

さて、人々が恋愛や恋愛相手に対する感情や態度の認識には、複数の種類やそれらに対する強弱が見られることは想像に難くない。そのような恋愛(相手)に対する意識や感情についていくつかの類型を提起し、各類型別にその特徴を記述しているものに、Lee(1977)の理論研究が見られる。Lee(1977)は、恋愛に関する書物から総合的に6つの類型を見出し説明している(エロス：美への愛、ストーゲイ：友愛的な愛、ルダス：遊びの愛、アガベ：愛他的な愛、マニア：狂気的な愛、プラグマ：実利的な愛、詳細は Table 1 参照)。Lee(1977)によると、これら6つの類型間に関連は、Figure1のような関係図が描かれるという。隣り合う類型同士は類似点が見られるが、お互いの距離が遠い類型同士はお互いを理解できないとされている。日本においてはこのLee(1977)の6つの恋愛類型を質問紙により簡便に測定する尺度を松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田(1990)が開発し、その男女差や恋愛の深まりとの関連を検討している。本研究においても、Leeの恋愛類型理論に基づいて作成された松井ら(1990)の尺度を使用し、恋愛相手に対する恋愛観を測定し、青年の恋愛観の個人差を測定する。そして、恋愛経験を経ることで、また恋人を持ち、その相手と結婚を意識するようになると、恋愛観のどの部分変動するのかを調べる。

Table 1 Leeの恋愛6類型(松井, 1993より)

マニア(狂気的な愛)	独占欲が強い。 嫉妬、憑執、悲哀などの激しい感情を伴う。
(項目例)	彼(女)が私を気にかけてくれないとき、私はすっかり気がめいってしまう。 彼(女)が私以外の異性と楽しそうにしていると、気になって仕方がない。
エロス(美への愛)	恋愛を至上のものと考えており、ロマンチックな考えや行動をとる。 相手の外見を重視し、強烈な一目ぼれを起こす。
(項目例)	彼(女)と私は会うとすぐにお互いひかれあった。 彼(女)と私は、外見的にうまく釣り合っている。
アガベ(愛他的な愛)	相手の利益だけを考え、相手のために自分自身を犠牲にすることも厭わない愛。
(項目例)	彼(女)が苦しむくらいなら、私自身が苦しんだ方がました。 私は彼(女)のためなら、死ぬことさえも恐れない。
ストーゲイ(友愛的な愛)	穏やかな友情的な恋愛。 長い時間をかけて、愛がはぐくまれる。
(項目例)	私は彼(女)との友情を大切にしたい。 彼(女)との交際が終わっても、友人でいたいと思う。
プラグマ(実利的な愛)	恋愛を地位の上昇などの手段として考えている。 相手の選択においては、社会的な地位のつりあいなど、いろいろな基準を立てている。
(項目例)	恋人を選ぶときには、その人は将来性があるだろうかと考えてみる。 恋人を選ぶ前に、自分の人生を慎重に計画しようとする。
ルダス(遊びの愛)	恋愛をゲームと捉え、楽しむことを大切に考える。 相手に執着せず、相手との距離をとっておこうとする。複数の相手と恋愛できる。
(項目例)	彼(女)とはあまり深入りせず、すっきりとした関係でありたい。 彼(女)とは定期的に会うよりも、気が向いたときだけ会っている。

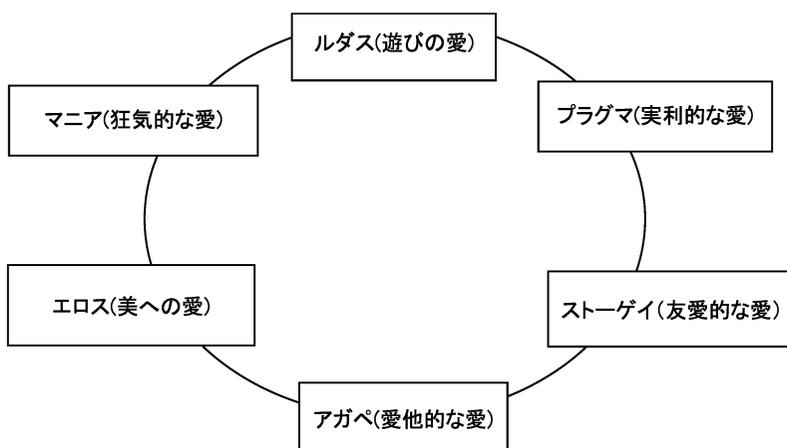


Figure 1 Lee の恋愛 6 類型の関係図

また、特定の他者と恋愛関係・夫婦関係にあるということは、他の他者と比較して相手のことが信頼でき、緊密な関係を築き上げることと関係があるだろう。現代青年の友人関係の特徴として、互いに傷つくことを避けるため、浅く広い人間関係を維持しながら友人とつきあうという現象が指摘されているが（大平，1995；岡田，1995）、現代の青年の恋愛関係や夫婦関係における人間関係や他者との心理的距離はどのようなものなのであろうか。本研究は、恋愛経験や恋人を持つということで、他者との心理的距離のあり方や、自分や他者に対する信頼感に及ぼす影響を検討する。

以上の問題意識から本研究では、青年期から成人期にかけての発達の観点から恋愛関係を捉え、青年期における恋愛経験や恋人の有無による変動要因を検討することで、恋愛経験や恋人の存在によって、恋愛観や相手との心理的距離を測定する一体感、自分や他者に対する信頼感の変化の様相を、横断的に検討する（目的1）。さらに、恋愛経験や恋人の有無により、恋愛を経た後の課題である結婚相手についてはどのようにとらえているのかについて、相手との間の一体感と、恋人のいる人のうち結婚を意識している人とそうでない人の間の信頼感の相違といった側面から調べる（目的2）。

研究 1

【目的】

研究1では、恋愛経験の有無・恋人の有無により、(1)交際相手との一体感の得点の差、(2)交際相手と将来の結婚相手との間の一体感得点の相違のあり方、(3)一体感と恋愛観得点の関連のあり方の違いについて検討する。これにより、本研究における目的1の恋愛経験や恋人の有無によって恋愛観や一体感の変動する様相と、目的2の恋愛相手と結婚相手に対する一体感の違いを明らかにする。

【方法】

1. 調査対象者：名古屋市内の大学生 200名（男 147名、女 49名、不明 4名、平均年齢 19.2歳）であった。

2. 質問紙：

(1)フェイスシート：現在までの恋愛経験の有無（「今まで、ある特定の人と恋愛関係にあったことがありますか」に対して「ある」、「ない」、「その他」の中から選択させた。）、現在の交際相手の有無、その交際相手との結婚を考えているか否かを尋ねた。

(2)恋愛観尺度：Lee(1977)の恋愛類型理論に基づき、松井ら(1990)が作成した尺度53項目のうち、天谷(2005)が実施し因子分析を行った結果、6つの下位尺度の因子負荷量の高かった項目から5項目ずつ、計30項目を使用した(5件法)。6つの下位尺度とは「エロス(美への愛)」、「アガペ(愛他的な愛)」、「マニア(狂气的な愛)」、「ストーゲイ(友愛的な愛)」、「ルダス(遊びの愛)」、「プラグマ(実利的な愛)」である。

(3)一体感尺度：Aron(1992)による一体感尺度を使用した。調査対象者と相手がそれぞれ円で表されており、調査対象者と相手との関係を最もよく表している図の番号を選ぶよう指示された。相手は、交際相手(恋人がいない人は想定)と将来の結婚相手についてそれぞれ回答を求めた。円の重なり具合が多くなると、得点が高くなるように配置した(7段階、Figure 2 参照)。

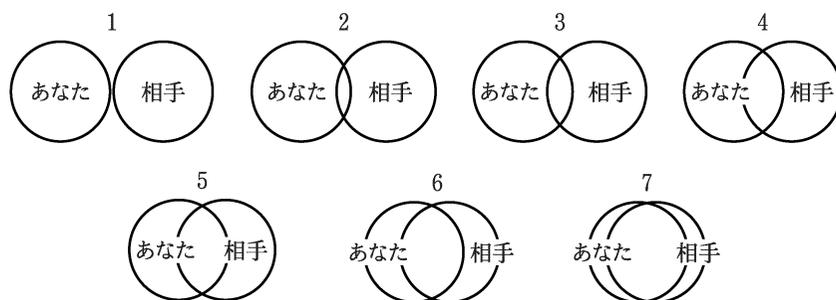


Figure 2 一体感尺度の選択肢

【結果と考察】

全調査対象者のうち、「恋人がいる」または「いない」と回答し、かつ「恋愛経験あり」または「恋愛経験がない」と回答した人について、「恋人あり」群と「恋人なし・恋愛経験あり」群、「恋人なし・恋愛経験なし」群の3群に分けた。その結果、「恋人あり」群は52名、「恋人なし・恋愛経験あり」群は68名、「恋人なし・恋愛経験なし」群は54名となった。

1. 恋愛経験・恋人の有無による一体感得点の差

恋愛経験・恋人の有無によって、交際相手や将来の結婚相手との距離がどのように異なるのかを検討する。「恋人あり」群・「恋人なし・恋愛経験あり」群・「恋人なし・恋愛経験なし」群の3

群間で、交際相手との一体感得点に差が見られるかどうかを、一要因分散分析を行い検討した。その結果主効果が見られたので($F(2,174)=3.37, p<.05$)、Tukey 法による下位検定を行ったところ、有意な差が見られなかった(Table 2)。

Table 2 恋人・恋愛経験の有無別の一体感得点

		平均	SD		F値	下位 検定
恋人あり (N=52)	一体感(交際相手)①	4.47	(1.94)	①・③・⑤間の一要因分散分析結果(F値)	3.37 *	n.s
	一体感(結婚相手)②	5.61	(1.62)			
恋人なし・ 恋愛経験あり (N=68)	一体感(交際相手)③	3.75	(1.56)	①-②間の t 検定結果(T値)	-4.60 ***	
	一体感(結婚相手)④	4.95	(1.87)	③-④間の t 検定結果(T値)		
恋人なし・ 恋愛経験なし (N=54)	一体感(交際相手)⑤	3.72	(1.75)	⑤-⑥間の t 検定結果(T値)	-5.59 ***	
	一体感(結婚相手)⑥	4.85	(1.78)	①-②・③-④・⑤-⑥得点差の一要因分散分析結果		

次に、「恋人あり」群・「恋人なし・恋愛経験あり」群・「恋人なし・恋愛経験なし」群の3群間で、将来の結婚相手との一体感得点に差が見られるかどうかを、一要因分散分析を行い検討した。その結果主効果が見られたので($F(2,185)=3.07, p<.05$)、Tukey 法による下位検定を行ったところ、有意差が見られなかった。

さらに、3群それぞれにおいて、交際相手との一体感得点と将来の結婚相手との間の一体感得点の間に違いが見られるかどうかを検討した。その結果、3群ともに2つの一体感得点の差が有意に0でない結果となった(「恋人あり群」は $T=-4.60, p<.001$ 、「恋人なし・恋愛経験あり群」は $T=-5.54, p<.001$ 、「恋愛経験なし」群は $T=-5.59, p<.001$)。したがって、3群共に将来の結婚相手の方が、交際相手よりも一体感得点が高いことが示された。

2. 恋愛経験・恋人の有無によって、交際相手と将来の結婚相手との一体感の差得点の相違

交際相手との一体感得点と、将来の結婚相手との間の一体感得点の間の差得点の大きさが、恋愛経験・恋人の有無によって異なるかどうかを、一要因分散分析を行い検討した。その結果、主効果は見出されなかった($F(2,166)=0.06, n.s.$)。以上から、恋愛経験・恋人の有無によって、交際相手から将来の結婚相手に変わること、縮まる心理的距離の程度には違いがないことが示された。

3. 恋愛経験・恋人の有無3群による恋愛観得点の差

恋愛経験・恋人の有無3群によって、恋愛観得点に差が見られるかどうかを、一要因分散分析を行い検討した。その結果、エロス得点について主効果が見られた($F(2,197)=15.32, p<.001$)。Tukey 法による下位検定を行ったところ、「恋人あり」群が「恋人なし・恋愛経験あり」群より高く、さらに「恋人なし・恋愛経験あり」群が「恋愛経験なし」群よりも有意に高かった($p<.05$,

Table 3 参照)。なお、Lee 恋愛 6 類型尺度における各下位尺度の α 係数は.72～.83 の範囲であった。

Table 3 恋人・恋愛経験の有無による恋愛観尺度得点の平均差

	エロス	アガベ	マニア	ストーゲイ	ルダス	プラグマ
恋人あり (1:N=52)	17.91 (3.60)	14.73 (5.14)	17.21 (4.98)	16.66 (4.40)	14.07 (5.05)	11.82 (5.28)
恋人なし・恋愛経験あり (2:N=68)	15.93 (3.18)	14.62 (4.17)	16.64 (4.60)	16.64 (4.05)	14.96 (3.79)	12.51 (4.04)
恋愛経験なし (3:N=54)	14.58 (3.10)	13.94 (4.58)	15.55 (4.02)	16.37 (3.82)	15.65 (3.76)	13.18 (3.83)
F 値	15.32 *** 1>2, 1>3	0.56	2.09	0.10	0.12	1.42

注. *** $p < .001$, 上段は平均値、下段カッコ内は SD

4. 恋愛経験・恋人の有無の 3 群それぞれにおける一体感と恋愛観得点の関連のあり方

恋愛経験・恋人の有無の 3 群における一体感と現在の恋愛観得点がどのように関連しているのかを検討するため、恋愛経験・恋人の有無の 3 群それぞれの交際相手・将来の結婚相手との一体感の得点と、恋愛 6 類型の下位尺度得点間の相関を求めた (Table 4 参照)。

Table 4 恋人・恋愛経験の有無ごとの恋愛観尺度と一体感得点間相関

		エロス	アガベ	マニア	ストーゲイ	ルダス	プラグマ
恋人あり (N=52)	一体感(交際相手)	.41 **	.11	.17	.02	-.32 *	-.15
	一体感(結婚相手)	.22	.28 *	.19	.24 +	-.42 **	-.17
恋人なし・恋愛経験あり (N=68)	一体感(交際相手)	.06	.09	.22 +	.04	-.28 *	-.12
	一体感(結婚相手)	.22 +	.22 +	.36 **	.08	-.20 +	-.08
恋人なし・恋愛経験なし (N=54)	一体感(交際相手)	.41 **	.37 **	.31 *	.32 *	-.15	-.25 +
	一体感(結婚相手)	.27 *	.20	.42 **	.17	-.30 *	-.21

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

(1) 交際相手との一体感得点と恋愛観得点の関連について

交際相手との間の一体感得点と恋愛観尺度得点の間の関連について、「恋人あり」群はエロスとの間に正の関連 ($r = .41, p < .01$)、ルダスとの間に負の関連 ($r = -.32, p < .05$) が見られた。「恋人なし・恋愛経験あり」群は、ルダスとの間に負の関連 ($r = -.28, p < .05$) が見られた。「恋人なし・恋愛経験なし」群は、エロス、アガベ、マニア、ストーゲイとの間に有意な正の関連が見られた (順に $r = .41, .37, .31, .32$)。恋人がいる人にとっては、交際相手との一体感の高さに関連しているのは恋愛を至上のものと捉えてロマンティックな行動を取るエロスの高さであり、恋愛をゲームと捉えるルダスの低さであるが、この傾向は、恋人のいない他の 2 群とは異なっている。

ルダスの低さとの関連は、「恋人なし・恋愛経験あり」群においても見られるが、「恋愛経験なし」群ではその関連は消失する。恋愛経験を持つことで、また恋人を持つことで、恋愛をゲーム・遊びと捉えないことが、交際相手との一体感をより高めることにつながるようである。また、実際に自分に恋人が存在しているかどうかによって、その相手との恋愛関係をゲーム・遊びと捉えるか否かに「現実感」があり、そのような捉え方が相手との一体感の程度を左右しているとも考えられる。

また、「恋人なし・恋愛経験あり」群はルダス以外では一体感得点と関連しているものは見られなかった。恋愛経験はあっても恋人が現在いない人は、ルダス以外は今回の恋愛観尺度以外の要因が一体感得点の高さと関わっている可能性が考えられる。また、この群にとって恋愛相手との一体感は想像上の相手とのそれであり、現実に存在しない相手との一体感は、現在の恋愛観と関連していない可能性も考えられる。

さらに「恋愛経験なし」群にとって、ルダスやプラグマ以外の、恋愛や交際相手に対する恋愛そのものに対する一般的にポジティブな恋愛観（エロス・アガペ・マニア・ストーゲイ）に高い意識を持つことが、交際相手との一体感と関連していることがうかがえる。また、恋愛経験がないことで、このようなポジティブな恋愛観に、総じてあまり積極的に意識を持たないことが、交際相手との間にやや距離を置く関係を想定していることと関連している可能性も考えられる。

(2) 将来の結婚相手との一体感得点と恋愛観得点の関連について

将来の結婚相手との間の一体感得点と、恋愛観尺度得点間の関連について、「恋人あり」群はアガペとの間に正の相関 ($r=.28, p<.05$)、ルダスとの間に負の相関 ($r=-.42, p<.01$) が見られた。「恋人なし・恋愛経験あり」群はマニアとの間に正の相関 ($r=.36, p<.01$) が見られた。「恋人なし・恋愛経験なし」群は、エロスとマニアとの間に正の相関 ($r=.27, p<.05, r=.42, p<.05$)、ルダスとの間に負の相関 ($r=-.30, p<.01$) が見られた。

3群間で共通しているのは、将来の結婚相手との一体感とルダスの低さの関連である。現在、恋愛をゲームと捉える傾向が高ければ、将来の結婚相手との一体感が低くなるという関連は、交際相手との一体感とルダスの関連とは異なり、3群間で共通した関連のあり方である。

また、恋人のいない2群は、現在のマニアの高さと将来の結婚相手との一体感の高さが関連していた。現在恋人がいない人は、恋愛経験の有無に関わらず、恋愛に没入したり、相手に対する独占欲が強い感覚を多く持つことが、将来の結婚相手との一体感に寄与していると考えているようである。それは恋愛経験のない人の方が、より強く感じているようである。

(3) 恋愛観得点と交際相手・将来の結婚相手との一体感得点間の関連のあり方の3群間の相違

恋愛観得点と交際相手との一体感、恋愛観得点と将来の結婚相手との一体感の関連のあり方が、

3群それぞれでどのように変化しているのか見てみると、「恋人あり」群の相手との一体感については、交際相手から将来の結婚相手に変わると、エロスとの間にあった関連が消失し、アガペとの間になかった関連が出現する傾向が見られた。「恋人なし・恋愛経験あり」群の一体感については、交際相手から将来の結婚相手に変わると、マニアとの間の関連が強まる傾向が見られた。さらに「恋愛経験なし」群の一体感については、交際相手から将来の結婚相手に変わると、エロスとの関連が弱まり、アガペヤストーゲイとの関連が消失し、マニアとの関連が強まる傾向が見られた。

以上から、恋人のいる人にとっては、相手に尽くそうとするアガペ得点の高さが、交際相手よりも将来の結婚相手との一体感に寄与していると考えていることが示された。これは恋愛経験のない人には見られない傾向である。また、恋人がいない人にとっては、現在のマニア得点が高いと、交際相手との一体感よりも将来の結婚相手との間により強い一体感を想定していることが示された。そして恋愛経験がない人にとっては、交際相手との一体感はポジティブな恋愛観の意識を高く持つことと関連しているが、その相手が将来の結婚相手となると、それらのうちより強まるのはマニアのみとなり、恋人なし・恋愛経験ありの人と類似した傾向になっていることが示された。

まとめ

研究1の結果から、恋人の有無・恋愛経験に関わらず、交際相手との一体感よりも結婚相手との一体感の方がより強いものと認識していることが示された。また明確な結果は得られなかったが、交際相手との一体感や将来の結婚相手との一体感には、恋愛経験や恋人の有無による違いが見られることも部分的に示された。そして、交際相手・将来の結婚相手との一体感に寄与している現在の恋愛観が、現在の恋人の有無や恋愛経験によって異なることが示された。

研究2

【目的】

研究2では、恋愛経験・恋人の有無により変動する要因として信頼感を取りあげる。また恋愛経験・恋人の有無によってLeeの恋愛類型のどの下位尺度が変動するのか、年齢が上がるに従って変動するのかについても併せて検討する。さらに現在恋人がいる人の中で、その相手との結婚を考えている人とそうでない人との間での恋愛観・信頼感の相違についても検討する。

【方法】

1. 調査対象者：名古屋市内・名古屋市近郊の4つの大学・専門学校生379名(男性256名、女性112名、不明2名)であった。平均年齢は19.8歳(SD 2.61)であった。
2. 質問紙：

- (1)フェイスシート：現在までの恋愛経験の有無（「今まで、ある特定の人と恋愛関係にあったことがある」、「今まで、ある特定の人と恋愛関係にあったことがない」、「その他」）、現在の交際相手の有無、交際相手のいる人はその交際期間、その交際相手との結婚を考えているか否かを尋ねた。
- (2)Lee 恋愛観尺度：研究1同様、Lee(1977)の6つの恋愛類型理論に基づき、松井ら(1990)が作成した尺度53項目のうち、天谷(2005)が実施し因子分析を行った結果、6つの下位尺度の因子負荷量の高かった項目から5項目ずつ、計30項目を使用した(5件法)。
- (3)信頼感尺度：天貝(1995)による信頼感尺度24項目(6件法)を使用した。下位尺度は「不信」(項目例：自分で自分をしっかり守っていないと、壊れてしまいそうな気がする)、「対自的信頼」(項目例：私は、自分自身を、ある程度は信頼できる)、「対他的信頼」(項目例：これまでに出会ったほとんどの人は私によくしてくれた)の3つである。

【結果】

1. フェイスシートに関する結果

今までの恋愛経験について、「特定の人と恋愛関係にあったことがある」人は291名(77.4%)、「ない」人が81名(21.5%)であった。そして、「現在恋人がいる」人は121名(32.3%)、「現在恋人がいない」人は206名(54.9%)、「片思いの相手がいる」、「友達以上恋人未満の相手がいる」、「婚約者・配偶者」、「その他」、「不明」が53名(14.0%)であった。また、「恋人がいる」と答えた人の平均交際期間は18.41ヶ月(SD 19.68、最短1ヶ月、最長84ヶ月)であった。

2. 恋愛観尺度と信頼感尺度間の相関

恋愛観尺度と信頼感尺度間の相関を求めたところ、恋愛観尺度の「エロス(美への愛)」と信頼感尺度「対自的信頼」の間に.33、信頼感尺度「対他的信頼」の間に.35の有意な正の関連が見られた($p < .001$, Table5)。また、恋愛観尺度の「ルダス(遊びの愛)」と信頼感「不信」の間に.26

Table 5 恋愛観尺度と信頼感尺度間相関

	エロス	アガベ	マニア	ストーゲイ	ルダス	ブラグマ	対自	対他
信頼感：不信	-.06	-.10+	.19***	-.05	.25***	.27***	-.18***	-.45***
信頼感：対自	.33***	.08	.04	.14**	-.03	.01		.57***
信頼感：対他	.35***	.15**	.07	.16**	-.10+	-.04		
エロス(美への愛)		.27***	.30***	.12*	-.22***	.07		
アガベ(愛他的な愛)			.29***	.23***	-.30***	-.12*		
マニア(狂気的な愛)				.12*	-.22***	.06		
ストーゲイ(友愛的な愛)					.01	.02		
ルダス(遊びの愛)						.20***		
ブラグマ(実利的な愛)								

注.*** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$, + : $p < .10$

の相関係数が得られた ($p < .001$)。

3. 恋人・恋愛経験の有無による恋愛類型尺度・信頼感尺度得点の差の検討

1の結果に基づいて、調査対象者を「恋人あり」群、「恋人なし・恋愛経験あり」群、「恋愛経験なし」群の3群に分けた。その結果、「恋人あり」群は122名、「恋人なし・恋愛経験あり」群は134名、「恋人なし・恋愛経験なし」群は67名となった。この3群について、恋愛観尺度得点・信頼感尺度得点に差が見られるかどうかを、1要因分散分析を行い検討した。その結果、恋愛観尺度については「エロス」($p < .001$)、「ルダス」($p < .01$)得点について主効果が見られた (Table 6参照)。Tukey法による多重比較を行ったところ、恋愛観尺度の「エロス」では「恋人あり」群が他2群よりも得点が高く、「ルダス」では「恋人あり」群が、他2群よりも得点が低かった ($p < .05$)。

Table 6 恋人・恋愛経験の有無による恋愛観尺度得点・信頼感尺度得点の平均差

	エロス	アガベ	マニア	ストーゲイ	ルダス	プラグマ	不信	対自的信頼	対他的信頼
恋人あり (1:N=122)	18.10 (3.62)	14.66 (4.24)	17.21 (4.72)	16.75 (4.27)	13.14 (4.25)	11.66 (4.87)	33.45 (7.81)	25.19 (4.30)	33.22 (5.25)
恋人なし・ 恋愛経験あり (2:N=134)	15.87 (3.20)	14.30 (3.57)	16.99 (4.22)	17.21 (3.39)	14.53 (3.73)	11.94 (4.24)	31.07 (8.31)	24.01 (5.43)	32.67 (5.72)
恋愛経験なし (3:N=67)	14.84 (2.86)	14.22 (3.70)	15.90 (4.61)	17.06 (3.74)	14.93 (3.80)	13.13 (4.43)	33.16 (7.52)	22.09 (5.09)	29.04 (6.05)
F値	25.27***	0.38	1.97	0.46	5.86**	2.42+	3.23*	8.45***	13.03***
下位検定	1>2,1>3				1<2,1<3		1>2	1>3,2>3	1>3,2>3

注. *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$, 上段は平均値、下段カッコ内はSD

信頼感尺度については、「不信」($p < .05$)、「対自的信頼」($p < .001$)、「対他的信頼」($p < .001$)得点について主効果が見られた (Table 6参照)。Tukey法による多重比較を行ったところ、信頼感尺度の「不信」では「恋人あり」群が「恋人なし・恋愛経験あり」群よりも得点が高く、「対自的信頼」と「対他的信頼」では「恋人あり」群と「恋人なし・恋愛経験あり」群が「恋人なし」群よりも得点が高かった (すべて $p < .05$)。

なお、恋愛観尺度得点や信頼感尺度得点の発達差について、年齢による違いが見られるかどうかを一要因分散分析を行い検討したところ、主効果は見られなかった。

4. 「恋人あり」群について、その恋人と結婚を考えているか否かによる恋愛観得点・信頼感得点差

「恋人あり」群のみについて、その恋人と結婚を考えているか否かによって4群(「結婚を考えている」、「結婚はどちらともいえない」、「結婚を考えていない」、「結婚はわからない」)に分類した。この4群について、恋愛観得点・信頼感尺度得点に差が見られるかどうかを一要因分散分析を行い検討した。その結果、恋愛観得点についてはエロスとルダスについて主効果が見られた。

Tukey 法による下位検定を行ったところ、エロスについて「結婚を考えている」群が「結婚を考えていない」・「結婚はどちらともいえない」群よりも有意に得点が高かった ($p < .05$, Table 7 参照)。ルダスについては Tukey 法による下位検定による有意差は見出されなかった。

Table7 恋人あり群についてその恋人と結婚を考えているかどうかによる恋愛観・信頼感得点差

	N	エロス	マニア	ルダス	アガベ	ストーゲイ	ブラグマ	不信	対自	対他	交際期間
1 結婚を考えている	46	19.78 (3.13)	18.02 (4.59)	12.22 (4.73)	15.80 (4.37)	17.67 (4.62)	12.28 (5.33)	33.30 (7.21)	25.76 (3.65)	33.63 (5.26)	17.74 (20.56)
2 結婚はどちらともいえない	47	17.36 (3.27)	17.02 (4.55)	14.30 (4.01)	13.87 (4.15)	16.40 (3.69)	11.36 (4.16)	34.70 (7.41)	24.60 (4.58)	33.11 (5.08)	20.52 (19.89)
3 結婚を考えていない	12	15.83 (4.39)	16.33 (5.14)	15.17 (4.30)	13.25 (2.30)	16.42 (3.48)	11.67 (3.89)	34.17 (9.30)	26.45 (3.11)	33.67 (3.28)	14.92 (23.13)
4 結婚はわからない	14	17.64 (3.84)	16.50 (5.50)	11.86 (2.35)	15.43 (4.38)	15.93 (4.73)	11.07 (5.68)	32.50 (9.95)	23.43 (5.81)	30.79 (6.93)	12.86 (11.21)
F値		6.32	0.71	3.25	2.36	1.04	0.38	0.40	1.65	1.11	0.66
有意水準		***		*	+						
下位検定		1>2,1>3									

注. 上段は平均値、下段は SD

【考察】

研究 2 の結果、恋愛観得点については、恋愛経験の有無による差は見られなかった。恋愛経験の有無よりも、現実に交際相手が存在しているかどうかによって、恋人に対してよりロマンチックさを求めたり、恋愛をゲームと考えないことに違いが見られることが示唆された。また信頼感については、恋愛経験のある人の方が、そうでない人よりも自分や他者に対して信頼感を持っていた。恋愛経験が自分や他者に対する信頼感を育むか、または自分や他者に対して信頼感を有している人が恋愛を経験することが示された。一方で、恋人の存在が自己・他者への信頼感だけでなく、不信感も高めていることも示唆された。さらに、恋愛観・信頼感いずれについても発達差は見られず、恋愛経験や恋人の有無の要因の方が、恋愛観・信頼感の得点の変動に寄与していることが示唆された。

そして、恋人がいる人については、その恋人と結婚を考えているか否かの意識については交際期間による違いは見られず、エロスについてのみ違いが見られた。現在の恋人と結婚したいと意識するかどうかは、大学生の段階においては、恋愛についてロマンティックな感覚を有しているか否かが関わっていることが示された。

総合考察

本研究では、恋愛を発達の観点からとらえ、1.恋愛経験・恋人の有無によって恋愛観得点や一体感、信頼感がどのように変動するのか、2.交際相手から一歩踏み込んだ将来の結婚相手に対しては、一体感や恋愛類型、信頼感の観点でどのように変動するのか、を捉えることを目的とした。

1. 恋愛経験・恋人の有無による恋愛観・一体感・信頼感の変動

研究1・研究2における恋愛観得点との関連からは、共通して恋人がいる群が、そうでない2群よりもエロス得点が高かった。研究1では、エロス得点について、さらに恋愛経験の有無による差も見られた。そして研究2では、恋人のいる群が、そうでない2群よりもルダス得点が有意に低かった。

また、研究1における一体感との関連からは、明確な有意差はみられなかったが、恋人のいる人の方が交際相手との一体感が強い可能性が示唆された。そして現在の恋愛観と、交際相手との一体感の関わりについては、程度の差は見られるが恋人・恋愛経験の有無に関わらず、共通して恋愛をゲームと捉えないことが一体感の強さと関連していた。恋人のいる人は、エロスの高さと同様一体感が、恋愛経験のない人は、ルダスやプラグマ以外のポジティブな恋愛観の意識を高く持つことと同様一体感が関連していた。恋愛経験があって現在恋人のいない人は、現在の恋愛観と同様一体感の強さとは関連していなかった。

さらに研究2における信頼感との関連からは、恋人の有無よりも恋愛経験の有無の方が、自分に対する信頼感や他者に対する信頼感の高さの違いに寄与していた。また、恋人がいることが、不信感の高さにも寄与していることが示された。

以上から、恋愛経験や恋人の存在は、交際相手との心理的距離を縮め、恋愛をゲームと捉える傾向を減少させるようである。松井(1993)は、恋愛の進展段階のうち、ルダスはキスの段階でピークに達し、その後の恋愛の進展段階では減少することを示しているが、本研究の結果もそれを傍証していると言える。また、恋愛経験は自分に対する信頼や他者に対する信頼が高まることと同様に関連している。大野(1995)は、青年期(大学生)の恋愛を「アイデンティティのための恋愛」と呼び、自分に自信を持つために、交際相手からの賛美・賞賛を求めるという特徴を示している。本研究の自分や他者に対する信頼感が恋愛経験で高まるという結果も、大野(1995)の言う大学生に特有の恋愛の特徴を示しているとも考えられる。

2. 将来の結婚相手をどのように捉えているのか～一体感・恋愛観・信頼感より

研究1の結果からは、恋愛経験や恋人の有無に関わらず共通して、交際相手よりも結婚相手の方が一体感がより強いと捉えていることが示された。また有意ではないが、結婚相手との間の一体感の強さは、恋人がいる人の方が強い可能性が示唆された。

そして、恋人のいる人は現在相手に尽くすアガベが、将来の結婚相手との一体感を強める要因として働き、恋人のいない人は相手に没入するマニアの高さが結婚相手との一体感を強める要因として働くことが示された。恋人がいるかいないかによって、結婚相手との一体感の高さと関連している恋愛観の種類が異なるようである。恋人のいる人は、現実に交際している相手が存在し

ているので、相手に没入するマニアの高さは既に満たされており、そのような要因は結婚相手との一体感に寄与しないのかもしれない。一方で恋人のいない人は、現在交際している相手が存在していないので、そのような相手を望み、かつその相手に没入することが期待され、その没入の延長線上に結婚相手としての存在を捉える傾向があるのかもしれない。

また、研究2の結果からは、恋人のいる人の中で将来その相手との結婚を考えている人は、そうでない人に比べて、恋愛をゲームと捉える傾向がより低く、ロマンティックな行動を取るエロスの高さがより高かった。恋人がいる人にとっては、ロマンティックな思いをその相手に抱いていることが、恋愛からその次の段階である結婚についての意識を向かわせているわけである。西平(1981)は恋愛の「恋」について、「異性間の魅力・美的条件の追求」の比重が大きいことを指摘しており、本研究における、現在の恋人と結婚を考えている人のエロスの高さは、まだ大学生の現段階では「恋」の要素が強い状態を示しているとも考えられる。しかし、研究1において、結婚を考える相手との心理的距離を縮める要因として、現在その相手に尽くしたいと思えるかどうかに関わっているという結果が得られた。西平(1981)が成人期の発達課題である「親密さ」の確立に深く関わる「愛」の本質として「無条件性の上に立つ相手への配慮」を指摘している。大学生の現段階における想定ではあるけれども、将来の結婚相手との間の心理的距離に現在のアガペの高さが関連しているというこの結果は、この西平(1981)の指摘を支持しているものと考えられる。このような結果は、恋人との交際期間の長さや年齢があがることとは関連しておらず、恋愛経験や恋人との実際のやり取りがそのような考えを育むものと考えられる。

本研究の問題点と今後の課題

本研究の問題点として、以下の2点が挙げられる。まず第1点目として、本研究の対象者は大学生であり、結婚についての意識がまだ現実的でない世代を対象とした調査による結果である。本研究の結果は、実際に結婚を現実的に考える世代よりも若い世代に相当し、本結果はそのような世代における様相を推測するための手がかりとなる位置づけのものである。今後は大学を卒業した世代にもアプローチする必要がある。

そして第2点目として、本研究の恋愛経験や恋人の有無による群分けは、実際の同じ人が恋愛経験のない状態から恋愛に至り、結婚を意識するというによる時間軸を、横断的な観点から検討したものである。従って、実際のそのような時間的流れを追跡して検討したものは異なる。この群の違いが、別の要因を背景としている可能性もあるので、今後は縦断的な検討を行っていく必要性もある。

【引用文献】

- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- 天谷祐子 2005 恋人と結婚相手に対して求めるものの違い—性差と恋人の捉え方・恋愛経験の有無から—
名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 52, 9-19.
- Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. 1992 Inclusion of other in the Self Scale and the Structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63(4), 596-612.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: W. W. Norton. 仁科弥生訳 1977/1980 幼児期と社会(1・2) みすず書房
- 堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116-128.
- Lee, J. A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 3, 173-182.
- 松井豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.
- 松井豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 1990 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立立川短期大学紀要, 23, 13-23.
- 松井豊 1993 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, 64, 335-342.
- 西平直喜 1981 友情・恋愛の探求 大日本図書
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 大野久 1995 第4章 青年期の自己意識と生き方(Pp.89-124) 落合良行・楠見孝(編) 1995 講座 生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し—青年期 金子書房
- 大平健 1995 やさしさの精神病理 岩波書店
- 詫摩武俊 1973 第4章恋愛と結婚 依田新ら(編) 1973 現代青年の性意識(現代青年心理学講座5) 金子書房

注. 本研究の一部は、日本発達心理学会第17回大会、日本心理学会第70回大会で発表された。